

# アビダルマ仏教における処・界の建立と八句義

吉 元 信 行

## 一 アビダルマにおける存在の分析

原始仏教において、あらゆる存在は色・受・想・行・識の五蘊に分類された。しかし、次第に存在の分析が進み、一切法について十二処あるいは十八界という分類がなされるに至って、そこには五蘊には含まれない涅槃等の無為法も諸法の分類に含まれるようになった。アビダルマに至って、有為法を機能的に、色・心・心所・心不相応行に分類し、さらに、これらに無為法を加えた五位の分類が成立したのもこのような事情によるものである<sup>①</sup>。

1 (吉元)

アビダルマにおいて、諸法の体系化には、①色・無為の五位、②蘊処界の三科、③五蘊・三無為の八句義というおよそ三つの型があり、ほとんどのアビダルマ論書において

は、①または②、もしくはその混合された方式で解説されている。ただ、『入阿毘達磨論』のみが次のように③八句義の分類の仕方で説かれていることが指摘されている。

謂く、善逝の宗に八句義あり。一に色、二に受、三に想、四に行、五に識、六に虚空、七に抃滅、八に非抃滅なり。これ総じて一切の義を摂す。(T. 28. 980c)

ところが、近年、『俱舍論』への反駁を目的に述作され、正統有部の思想を伝えていると見られる『アビダルマデイーパとその釈』(Abhidhamadīpa with Vibhāṣāprabhavittī, 以下『デイーパ』と称する)では、この③八句義によって一切法の分類的考察がなされていることが明らかにされた。『デイーパ』では、次のように説かれる。

八句義 (aṣṭau padāntah) —— 五つの有為〔なる五

「蘊」と三無為——が説明された。そして、その限り、すべてはすなわち有為と無為である。

そういうことは、処 (āyatana) と界 (dhātu) を建立することによって確定される。(ADV. p. 4, 21-23)

『ディーパ』では、この部分の直前に、ヴァイシェシカ学派の説く「方」(dis) と「我」(ātman) は非存在 (asatya) であり、また、サンクヤ学派の説く「勝因」(pradhāna) も恒常でなく (na nityam) と説き、「それ故に、一切智者によって建立された三無為のみが恒常であることが確定する」(ADV. p. 4, 30) と説明され、ジャイニ校訂本による限り、その前の部分に、fol. 2-30 までの二十九葉が欠落していることになっている。fol. 1 では四諦についての解説があり、道諦の説明の途中で欠落しているので、この八句義の解説のほとんどが欠落していることになる。

ただ、この八句義の解説の最後にあたる現存部分に、ヴァイシェシカ学派等の外教において説かれる常住なる存在を破して、三無為のみが恒常であると説いているところから、おそらく『俱舍論』等で論難の対象となっている説一切有部の無為実有説に対する疑義への反論も用意されていたであろう。しかし、残念ながら『ディーパ』ではそ

の重要な部分が欠落しているが、そのことが処と界の建立によって確定するとされるので、以下、それらの解説を見よう。

すなわち、色蘊は眼等の十処・界である。

〔受・想・行の〕三蘊及び無表と三無為とを含んだもの (sāvijñaptidhruvatya)<sup>③</sup> とは法〔処・界〕と称される。

また、残りの「識」蘊は意〔処〕と称され、七識界である。(ADV. p. 5, 5-6)

ここに、アビダルマにおける存在の体系的分類である三科建立の説明がなされる。五蘊の内、色蘊は十二処の中では眼・身・色・触の十処に、十八界の中では同じく、眼・身・色・触の十界に展開する。受・想・行の三蘊と色蘊の中の無表色、及び五蘊には含まれない三無為は法処と法界に相当する。また、識蘊は、十二処の中では意処になり、十八界の中では眼界と眼識・意識界に展開することになる。そうすると、有為法である五蘊が十二処・十八界に展開するときに、法処・法界の建立によって、無為法が新たに分析されることになる。その意味で、有為法・無為法という観点に立つ限り、五蘊・三無為の八句義は、一切法についての合理的な分類であるということが出来る。

## 二 処の 建立

それでは、五蘊から開かれる処 (āyatana) と界 (dhātava) の意味について『ディーパ』に見てみよう。

すなわち、処 (āyatana) は生じてくる門 (āyadvara) であり、

界 (dhātu) は種姓 (gotra) であると説明される。

次のような説明がある。心・心所というものが āya (生じてくること) をこれら (処) が tanvati (拡張する) から、āyatana (処) である。 (ADV. p. 5, 10-11.)

以上の説明は、『俱舍論』や『順正理論』とはほぼ同趣旨の内容である (AK. p. 13, 16, T. 29, 343c)。これは、処 (āyatana) の語を āya + tana と語源分解し、āya を vi (来る) 、tana を vītan (拡がる) を語根とする意味に解釈したものである。ところまで、『ディーパ』では、このあと上記両論にはない次のような説明が加わっている。

七心界と四無色蘊とは、これら四縁を本質とすることによって、拡がる (pratāyate) 、あるいはその生起に還る (pratāyate) から āyatana である。

(ADV. p. 5, 12-13.)

つまり、āyatana を pratāyate と pratāyate と pratyāyate との二

語で説明していることは注目される。pratāyate とは、pra-vītan の受動態で、「外に拡がる」「前に進む」という意味になる。十二処の中の意処が七心界 (意界と六識界)、また、法処の一部が五蘊における受・想・行蘊に拡がるということである。pratāyate とは、prati-vīti と分解され、「もとに還る」という意味である。七心界に展開したものが意処に、受・想・行蘊に展開したものが法処に還元されるという意味であろうか。

ちなみに、南伝の論書 *Visuddhimagga* では、「処」の一般的定義として (avisesato) 、次のような説明をしている。努力すること (āyatana) から、生じてくるもの (āya) を拡張すること (tanana) から、生じたもの (āyata) を導く (nayana) から、処 (āyatana) であると知るべきである。 (Vism. 481. 22-23.)

*Visuddhimagga* では、āyatana を āya (vi) + tanana (vītan) と āyata (vi) + nayana (vīti 導く) との二様に解釈している。この内の第二義は『ディーパ』のそれとも異なっている。

ところで、先の『ディーパ』の偈でいう「七心界と四無色蘊」とは十八界の中で意界と眼識界・意識界及び五蘊の中の色を除いた受・識蘊であり、いずれも非物質的・精神

的存在である。説一切有部の因縁論によると、一切法の中で、因果の法則の及ばない三無為を除いた諸法の内、色法は因縁と増上縁の二縁、心不相応行の中の無想定と滅尽定は因縁・等無間縁・増上縁の三縁、その他の心不相応行は因縁と増上縁の二縁によって生じるのに対して、心・心所のみは具に四縁によって生じるとされているが、ここにいう七心界と四無色蘊とはまさにこの心・心所に相当する。

このように、処は物質的要素を主観的存在（五根）と客観的存在（五境）とに開くのに対して、心そのもの（心）と心理的要素（心所）を意処と法処とに集約している。

「生じてくる門」とは、まさに体験の入り口であるということである。瑜伽行派のアビダルマ論書である『阿毘達磨集論 (Abhidharmasamuccaya)』でも伝統的な「生じてくる門（生長門）」の義を採用しながら (AS, 65a, T. 31, 666c) 、その註釈 *Abhidharmasamuccayabhāṣya* では、「種子 (bija) の義であり、あらゆる種類の法を摂する (saṃgraha) 義であるとも知るべきである」(ASBh. p. 19, 21) と説明されようになるのはそのような意図であらうか。

また、*Visuddhimagga* では、さらに、(1) 住処 (nivāsatiṭṭhāna) (2) 鉤山 (ākara) (3) 会合処 (samosaraṇa) (4) 原因 (kāraṇa) の四義をあげてゐる (Vism. 482)。

ところで、北伝アビダルマの教義を集大成した『婆沙論』七三では、「処」の語義について十二種をあげているので、その要旨を列挙してみよう (T. 27, 379ab)。

① 生門 所依と所縁の上に心・心所法を出生し、相続を長養する。

② 生路 所依と所縁の内に心・心所法を通し、相続を長養する。

③ 蔵 宝庫の如く、所依と所縁の内に心・心所法を積集する。

④ 倉 倉庫の如く、所依と所縁の内に心・心所法を積集する。

⑤ 経 織物の縦糸の如く、所依と所縁の上に心・心所法を遍布する。

⑥ 殺処 所依と所縁の内に無量種の心・心所法があつても無常滅として滅するところとなる。

⑦ 田 田の如く種々の心・心所法を生長する。

⑧ 池 池の如く世間の諸苦楽を滅尽させる。

⑨ 流 諸処の流れを正念によって防護し、正慧によって堰塞する。

⑩ 海 色の波濤に対して自制するものは眼の海を渡り、陰難を免れる。

⑪白 眼等の処は明瞭である。

⑫浄 眼等の処は真実・澄潔である。

伝統的アビダルマ論書では、上述の如く、このうちの①「生門」の義が採用されているが、その他の語義も、処の意味を種々の観点から説明したものとして位置づけることができよう。先の *Abhidharmasamuccayabhāṣya* における解は、③④に相当しようか。この中の⑧池・⑨流・⑩海については、『婆沙論』では次のような經典を引用して説明している (T. 27. 379b)。

### (⑧池)

水は何の池より出で、何処の道を通ぜざる。何処に世間の苦樂等を撰して、皆尽くすや。

眼・耳・鼻・舌・身・意と、及び諸余の処、此は名と及び色とを撰して、よく余あることなからしむ。水は此の池より出で、此の処の道を通ぜず。此の処は、世間の苦樂等を撰して、皆尽くすなり。

### (⑨流)

諸の処、將に流泄せんとするに、何を以てか能く制防せん。若し彼より已に流るれば、誰か復た能く偃塞せんや。

諸の処、將に流泄せんとするに、正念こそ能く制防す。

若し彼より已に流るれば、淨慧こそ能く偃塞せん。

### (⑩海)

苾芻よ、当に知るべし、諸の有情類は眼を以て海となし、現前の諸色は是れ彼の涛波なり。色の涛波に於いて自ら制抑する者は、能く眼の海を度し、洄復と邏利婁(羅刹)等の種々の險難を免るを得ん。乃至、意と法とを広説することも亦爾り。

⑧では、眼・意以外に「諸余の処」として、色・法処が暗示されており、また、⑩では、明らかに十二処が意図されて説かれている。これらの部分について、先学の調査によると、⑧⑨は『雜阿含』一三二九 (T. 2. 366c-367a)、また、⑩は『雜阿含』二二七 (T. 2. 54a) にパラレルが見出されている。特に、前者には⑩に相当する「海」「大海」なる語を含む対応偈もあり、ずいぶん変化はしているが、一応、上記引用經典の典拠となしうるであろう。

この『雜阿含』一三二九は、娑多耆利・醯魔波低 (Sāgāṇa-Hemavata: 七岳・雪山夜叉) らの「苦より解脱する方法」についての質問に対する釈尊の回答である。そこにおける上記⑧のパラレルのあたる偈は次のようになっている。

泉は何によりて転還し、惡道は何ぞ転ぜざるや。

世間の諸苦樂は、何に於いてか而も滅尽するや。

眼・耳・鼻・舌・身、及び意入処は、

彼の名及び色に於いて、永く滅尽して余なくば、

彼の泉に於いて転還し、彼の道に於いて転ぜず。

彼の苦及び樂に於いて、無余なる滅尽を得る。

(T. 2. 366c)

ここでは、⑧における「及び諸余の処」にあたる句がな  
いことは注目してよいであろう。このパラレルは十二処成  
立の過程を示しているようである。なお、これらの箇所につ  
いては、『雜阿含』以外にも、先学によって数多くのパ  
ラレルになる資料が指摘されているが、この経の原型はさ  
らに『スッタニパータ』第一「蛇の章」の中の九「雪山に  
住む者」に遡りうる。そこにおいては、⑧にあたるパラレ  
ルはないが、⑨と⑩に対応するものとして次のように説か  
れている。

(雪山夜叉) いったい誰がここで暴流 (ogha) を渡  
るのですか。誰がここで海 (anāva) を渡るのです  
か。底なく手がかりもない深い「海」に誰が沈まない  
のですか。

(釈尊) 常に戒を保ち、智慧あり、よく精神統一し、  
内省し、念あるものが、渡り難い暴流を渡る。

愛欲の想いを離れ、あらゆる束縛を超え、歡喜と生  
存を減し尽くした人は深い「海」に沈まない。

(Sn. 173-175.)

『スッタニパータ』では、この偈の前に、苦悩の原因と  
して次のように説かれる。

世尊は、「雪山夜叉よ、六つのものがあると世間〔の  
苦悩〕は生じる。六つのものに親しみ、六つのものだ  
けにとらわれ、六つのものに世間は悩まされている」  
と。

(Sn. 169.)

意を第六とする世間における五つの愛欲を特質とする  
もの (pañcakamagūṇa) が説かれている。これにつ  
いての欲を離れば、こうして苦悩から解放される。

(Sn. 171.)

「六つのもの」について、註釈で、「六つの内・外の処  
(六根・六境) が生じるとき、有情世間が〔生じ〕、また  
穀物等という点で行 (saṅkhāra) としての世間が生じる  
のである」(SnA. II. 211, 3-5) と説明されるように、苦悩の  
原因としての六つのものを分析して、眼・意と色・法の十  
二処が導き出されたのであろう。そこで、「それについて、  
五つの愛欲を特質とするものと称される対象領域との理解  
によって、それを対象領域とする五処 (色・触) がまさし

く言われた。それらについての意が第六であるということ  
で、意を第六とするものが説かれていと明らかにされた。  
これについて内における第六の意処と解することによって、  
その対境である法処がまさしく言われた」(SnA. II. 212,  
20-25)と注釈されるのであろう。

このように、十二処は、人間の苦悩からの解放という切  
実な問題から導き出された、主観と客観を認識の生門とす  
る経験という観点からの存在の分析であった。

### 三 界の建立

『ディーパ』では、界について次のように定義される。

しかし、界(dhātu)の意味は種姓(gotra)という意  
味である。次のような説明がある。一つの身体の山  
(śāṇṭa-parvata)に十八の法よりなる種姓がある。

(ADV. pp. 5, 1-6.)

界の定義についても、伝統的アビダルマでは、種姓  
(gotra)という定義にはば統一されてゐる。ここにおけ  
る説明も、『俱舍論』などにおいて、一つの山の中にいろ  
んな鉱物の原石(gotra)があつて鉱脈(dhātu)と呼ばれ  
るように、一つの身体に十八の種姓があつて、十八界と呼  
ばれると説明される所に起因しよう。『俱舍論』では、「生

まれるもと(ākara)である」と解釈される(Cf. AK. p. 13)。  
また、同論では「他の人々の説」として、「この界という  
語は本源(jā)を言い表す。自性をもった十八の法の本  
源が十八界である」(AK. p. 13, 20-21)と説明される。いず  
れもgotraの意味での解釈のようである。

*Vissuddhimagga*では、「一般的定義」として、次のよう  
な説明がある。

「苦の」過程(vidhana)を用意し(vidahati)、「そ  
れが」置かれ(dhīyate)、「この界」によつて「その  
過程が」用意され(vidhīyati)であるいは、「ここに置  
かれる(dhīyate)から」界(dhātu)である。

(Vism. 485, 2-3.)

これは、dhātuを「ずれも」(置く)を語根とする  
vidhana, vidahati, dhīyate, vidhīyatiで説明してゐることを  
示す。これは、界の語義をその語根より導き出したものに  
他ならない。さらに、この論書では、界の語義を四種類  
出してゐる。(1)自性を保持する(sabhāvan dhareti)。(2)  
智・所知の成分(nāṇañeyyāvayava)。(3)相互に相異な  
った相に判別されつづる(aññamañña-visabhāga-lakkhaṇa-  
paricchinna)。(4)単に生命のなまもの(nijjīva-matta)  
(Vism. p. 485)。(5)この(1)の語義は dhāreti とつて説

明からもわかるように、「一般的定義」と異なつて *vdhi* (保持する) という語根を導き出しており、(2) は *gotra* と関連しているようであるが、(3)(4) の語義は他の論書にない解釈である。

『婆沙論』七一では、「処」と同様に「界」についても次のような種々の語義解釈をあげている (T. 27. 367c 要旨)。

①種族 山の中にある多種の鉱石の異類の種族あるごとく、一相続身の内に異類の種族がある。

②段 次第に段に物を置いて種々の名を得るごとく、十八界を段に置いて有情等とする。

③分 男女の身体に十八の分がある。

④片 男女の身体に十八の片がある。

⑤異相 十八界それぞれの相が異なっている。

⑥不相似 ある界は他の界と不相似である。

⑦分齊 ある界の分齊 (區別) は他の十七界と異なる。

⑧種々因 これを因として眼界があるとしても、これを因として乃至意識界があるわけではない。これを因として意識界があるとしても、これを因として乃至眼界があるわけではない。

⑨馳流 この諸界は三界等に馳流して生死に輪転する。

⑩任持 この諸界は自性を保持する。

⑪長養 この諸界は他性を長養する。

さきの『俱舍論』等における語義が上記の①であり、*Vissuddhimagga* の語義の内の「一般的定義」が上記の⑪であり、また(3)にあたるものが⑤に認められる。

ところで、『阿毘達磨集論』では、次のように説明される。

界 (*dhātu*) の意味はどのようなものであるか。一切法の種子 (*biṇṇa*) の意味であり、自相 (*svaṭakṣaṇa*) を保持する (*dhāraṇa*) 意味であり、結果と原因 (*kāryakāraṇa*) の関係 (*bhāva*) を保持する意味であり、そして、一切の種類 (*prakāra*) の法を攝すること (*sangraha*) により保持する意味である。 (As. 68b8.)

ここでは、先ほどの界の語義の内、*gotra* を「一切法の種子」とし、*vdhi* (保持する) を語根とする *dhāraṇa* との二義をあげている。ここで、その註釈では、「一切法の種子の意味とは、「界には」因の意味があることによって、阿頼耶識における「諸法の種子を界と名づけるのである」。結果と原因の関係を保持するとは、十八界の中の六識界と「六」根「六」境の諸界についての次第の如し」(ASBh. p. 19. 19-20.) と説明されているから、まさに上記『婆沙論』



における定義の⑧と⑩に対応しよう。

以上のような界の定義を見ると、主観と客観を通じての体験という認識の入り口である処の定義に比べて、明らかに主體的、精神的、原理的意味が含まれていることがわかる。それはもはや、十二処のごとき苦悩からの解脱を悟るためのものではなく、有情だけでなく、一切の存在の成り立ちを分析的に見るというアビダルマ的傾向を示すことになる。

ところで、『ディーパ』では、本節最初に言及した如く、界の定義は「種姓」の義を簡単に紹介しただけのものではあったが、その直後に次のような記述のあるのは、他の論書にないことであり、注目すべきである。

一二の堅固なるもの (dhurva-draya: 択滅・非択滅無為) についても、こゝで代置 (pratinidhi) として位置づけらるべき得 (prāpti) が種姓となれるものであると知られる。また、虚空 (ākāśa) 「無為」は、すべての大種と大種所造色を保持する (dhara) からそれもちこでは有る。あるいは、自相を保持すること (dharāṇa) からそれは界である。 (ADV. p. 5, 5-8.)

この記述は、『俱舍論』にも見られる「それでは、無為は界ではないではないか」(AK. p. 13, 30) という経部から

の論難を意識してのことであると思われる。先に、『俱舍論』における界の定義を「種姓 (gotra) 〓生まれるもと (kāra)」と紹介したが、そのあと、その理由として先に生じた眼は後に生ずる眼の同類因となるからであると説明する。そこで、界に「因」という意味があるとすれば、無為は因果の法則を離れたものであるから、無為も界に含まれるとするのはおかしいとの批判である。もともと世親も無為を実有とする正統有部の考え方に批判的であった。この論難は、そのようなところに出されたものである。これに対して、有部の側からは、界は心・心所の生まれるものになるから、やはり界であると回答される。このことについて称友は次のように注釈している。

やはり心・心所のとは、何を「意味しているのか」。  
「この句は」生まれるもと (ākāra) と陳述される。  
「根と境の」二を所縁として識が生ずることとて、  
すべての界は、必ず所縁「縁」(ārambana) と増上  
「縁」(adhipati) として相相応する識の縁であるから  
生ずるもと (ākāra) である。 (AKV. p. 45, 9-12.)

ここに注釈されるように、認識の生ずる場合、すべての界は、心・心所の所縁となるという所縁縁となり、また、他の法の生ずることに影響を与え、生ずることの妨げにな

らないという増上縁になるのである。したがって、心・心所の所縁縁となり、また有為法の増上縁となる無為法は、生ずるもとという意味で界であると言ってもよい。

先の『ディーパ』における「二つの堅固なるもの」とは、摂滅・非摂滅の二無為を意味する。このうち非摂滅は、諸法の縁闕不生のときに得するものであり、すべての有情に具わっており、摂滅とは、慧の摂力によって得する滅諦・涅槃であり、一部の聖者と凡夫に具わっているものである。したがって、これら二無為は、心不相応行中の得 (prāpti) という実法によってもたらされるものである。そういう得はやはり、心・心所の生ずるものになるものであるから、明らかに種姓と言えるであろう。

また、無為の中でも虚空を具える有情はありえないから、虚空の得はない。しかし、虚空は、すべての物質的存在 (大種と所造色) を保持するというはたらきをするから、それも種姓と言えるであろう。そのようなところからも、「自相を保持することからそれは界である」という定義がもたらされるのである。ここに、南伝の *Vissuddhimagga* では、*vidhā* (置く) という語根で解釈されたものが北伝の論書では、*vidhī* (保持する) という語根で解釈されるにいたって、界の意味が、実体的になっていくようである。

#### 四 処・界建立の意義と八句義

それでは、十二処・十八界はどのようにして建立されたであろうか。『ディーパ』では、次のように説明する。

さて、何故に十二処と十八界が別々に説かれるのか。このことは、どちらかだけの説明では理解できないからである。次のように説明する。

牟尼は有色の觀察に好意を持ったもののために十二処を

知覚 (buddhi) 等が同一であるとの考えを除くために十八界をお説きになった。 (ADV. p. 6, 6-7)

この部分を長行によって理解すると、およそ次のようである。色・受・相・行・識の五蘊の中では、有色 (*rūpin*) といえば、色のみである。そこで、この有色をさらに分析しようとするものために、色を五根・五境の十処に開いた十二処を建立した。ところが、このように有色の分析に好意を持ったものが十八界の分析を見た場合、その中の七心界が色像よりなるもの (*prātibhāka*) に相似して見られてしまうから、かえって洞察しにくい。したがって、有色に好意を示すものに十二処の分析が最適である。

ところで、十八界の建立について、「知覚等が同一であ

るとの考えを除くために」と説かれる。十八界では特に精神的存在が七心界として分析される。これは、精神的作用(buddhi: 知覚)が単一のものであるとの固執を除くために説かれたものである。また、個体(pinda: 聚色)が唯一の我を有するという固執を除くためにも十八界が建立された。人間の身体が六根・六境という十二の要素に分析されるだけでなく、さらに六識という要素が加わるとすれば、そこには我なる実体は存在しないことがわかるであろう。

このあと『ディーパ』では、『俱舍論』と同様に、有情に愚と機根と希求の程度に三種あることから蘊・処・界が説かれると説明される。先の『ディーパ』の所説は、この中の「愚」という点で、「心所・色・色と心」に対して愚かなるものに対してそれぞれ蘊・処・界が説かれたとされるアビダルマの通説を『ディーパ』独自に、「好意を持つたもの」という点で説明し直したものである。

以上検討したように、五位によるアビダルマ独自の諸法の分析を蘊・処・界という三科建立によって説明することは非常に複雑であり、特に説一切有部では重要な実法に数えられる三無為が法界・法処の一部でしかないというのは問題となったであろう。

その意味で、初期アビダルマ論書である『品類足論』の

「弁五事品」では五位の分類によって説かれているが、桜部博士の指摘する如く、この五位の分類はその後の論書には直接には採用されず、後期の代表的なアビダルマ論書である『俱舍論』などでは、蘊・処・界の三科に五位の分類を導入したような複雑な説き方になっている。それは、伝統的な阿含以来の三科の体系に従わざるをえないながらもアビダルマの理論的追求への欲求として、五位の分類を導入したのである<sup>⑧</sup>。そのことは瑜伽行派の論書『阿毘達磨集論』でも同様である。

ここで検討した『ディーパ』においても、諸法の分類的考察については、『俱舍論』への反駁という本論の構成から、当然『俱舍論』のそれを踏襲している。ただ、最初に言及したように、本論の冒頭において、『入阿毘達磨論』と同様に八句義の分類を採用している。ただ、これ以前においても、「八句義」という名称は用いられていないが、すでに、『集異門足論』に、「謂く、名色とは、名は云何。答う、受蘊・想蘊・行蘊・識蘊及び虚空・択滅・非択滅、是れ謂く、名なり。色は云何。答う、四大種及び所造色なり」(T. 26. 360c)とあるのは、このような方法論を示している。五蘊以外に三無為がはっきりと唱われているからである。このことは、すでに別に詳しく検討したように、

『俱舍論』において、無為法が実有であるとの説一切有部の正統説に対する論難が紹介され、それに対して、衆賢が『順正理論』において激しく反駁しているように、おそらく『ディーパ』においてもそのことがなされていたはずである（この部分は散逸部分となる）。

アビダルマ論書において、「句義 (padārtha)」なる語が用いられるのは、文字どおり「語句の意味 (padārtha)」という場合と、反対派であるヴァーイシェーシカ学派などの説く実体的原理（六句義・十句義など）を紹介する場合とである。ヴァーイシェーシカ学派によると、「句義は正知 (pramiti) の対象 (viśaya) である」と理解される。句義とはまさに、正知の対象としての実体的存在である。<sup>⑩</sup>

すなわち、『ディーパ』では、有為なる色・受・想・行・識という五つの範疇及び無為なる虚空・寂滅・非寂滅という三つの範疇をあえて外教の採用する「句義」なる語で表現することによって、それらが実体的なるものであることを強調しようとしたのであろう。すなわち、一切法についての八句義の分類があらためて採用されたのは、処と界の建立によって新たに設定された法処・法界に含まれた無為法が実有であることを明らかにしようとする意図が込められていたようである。

## 註

① 蘊処界の三科と五位の分類の成立については、桜部建『俱舍論の研究——界・根品——』（法蔵館・一九六九年）六五～七五頁、西村実則「蘊処界の改変と五位の成立」三康文化研究所年報一八・一二五～一五四頁参照。

② 桜部建「新刊紹介 Abhidhamadīpa with Vibhāṣāprabhavṛtti」大谷学報四一・一二・九五頁、拙著『アビダルマ思想』（法蔵館・一九八二年）五五頁、池田練太郎「入阿毘達磨論とその註釈書」印度学仏教学研究三五・二・九〇五、九〇三頁参照。

③ Jaini ed. では dhurva. となっているが、修正。

④ 深浦正文『俱舍学概論』（百華苑・一九六九年）二二〇頁参照。

⑤ 『国訳一切経』毘曇部一〇（大東出版・一九七五年改訂）四〇八頁における森章司による補注参照。

⑥ 村上真完・及川真介『ブッダのことば 註（二）』（春秋社・一九八六年）七〇～八三頁参照。

⑦ この部分、梵文・漢訳・チベット訳に異同あり、「」は漢訳により補う（T. 31. 704b）。

⑧ 桜部建『俱舍論の研究 界・根品』（法蔵館・一九六九年）七二～七五頁参照。

⑨ 拙稿「部派仏教における涅槃仮実の論争」『講座仏教思想（涅槃）』（平楽寺書店）に掲載予定。

⑩ 例えば、『俱舍論』を例にあげると次のような用法がある。

- ① 𑖦𑖩𑖪𑖫で、縁起 (prāṭīyasamutpāda) の語の意味 (padārtha) は何であるか。prāṭi は「至る𑖦𑖩𑖪𑖫 (prāṇi)」で、𑖦𑖩𑖪𑖫は「趣へ𑖦𑖩𑖪𑖫 (gati)」の意味である (後略)。(AK. p. 138.<sup>1-2</sup>)
- ② また、このようにヴァーイシェーシカ学派の人々「の考え」をあらわすことになる。彼らには次のような教義がある。同句義 (sāmānya-padārtha) と名づけるものがあり (後略)。(AK. p. 68.<sup>4</sup>)
- ⑪ 菱田邦男『インド自然哲学の研究』(山喜房仏書林・一九九三年)二五〇頁参照。

# 略号

「.....大正新脩大蔵経  
 パーリテキストの略号は、A Critical Pāli Dictionary の  
 Abbreviations、それ以外の略号は、拙著『アビダルマ思想』  
 「原典資料略符号」による。

(本学教授 仏教学)